

『閃光』と『肌光』 - 鉄への思い -

心情は『前向いて ただひたむきに』 そのengineは『Openness & Frankness』
技術屋としての姿勢は『不思議やなあ 面白いなあ』『観たり、聞いたり、試したり』

『現在の鉄』が『産業の米』ならば『古代 和鉄』の系譜は『日本の源流』。

日本各地には『たたら』と呼ばれる古代から連綿と続く『日本の和鉄』の膨大な痕跡がある。今表舞台では見えないが、これらと和鉄の流れが「日本を作り、日本の文化・産業を担ってきた」に違いない。日本全国の奥深い山々や川筋には、日本に鉄を伝え、鉄精錬をはじめた渡来人に始まる「産鉄の民」の系譜があり、また、日本各地の山深い谷筋には山を開き作られた鉄の精錬場の遺跡が残っている。この精錬場には各地から砂鉄や薪・墨などの原料が集められ、また生産された鉄が日本各地に運ばれていった。海岸沿いをまた、山を越え、そして幾筋もの川筋をさかのぼり、発達した通商の道が製鉄の山々から各地に張り巡らされた。

古くは大陸から日本への鉄伝来の道・日本各地への鉄伝播の道。そしてこれらは時代を超えて日本各地の文化・産業を担った「和鉄の道」。そこでは多くの人達が交流を繰り返しそして日本が出来てきた。

1988年昭和63年の夏スタート以来 十数年 日本各地を歩いた「Iron Road・和鉄の道」Country Walkを整理して一冊にまとめました。このcountry walkは材料研究者としての自分史のような気もしています。そこから 何が出てくるのか・・・

昭和43年に鉄鋼会社に入り、鉄鋼材料の研究者としてスタートし、約40年 鉄鋼・非鉄金属材料 そしてセラミックス・機能樹脂と仕事の変遷とともに本当に幅広い材料に取組み、材料科学 接合・ハイブリッド化 そしてその機能開発の研究者として、材料開発・実用化開発に関わることが出来ました。

恩師 田村今男先生からは

「鉄鋼は剛柔にして、しかもその態を変える。古くから多くの人々の知恵が使われている。

材料の成分・製造履歴が材料の性質にきわめて重要であり、『先人の知恵を見よ』」と教えられた。

また、専門の溶接・接合冶金の分野の諸先生・先輩諸氏からは

「溶接のルーツは「奈良の大仏」の鑄掛け。

「奈良の大仏」から「宇宙開発」まで脈々と続く溶接の歴史を見よ」と良く聞かされてきました。

「オリジンの大切さと「ルーツ」へさかのぼる解析。そして本質を見る眼」がいつも頭の中を駆け巡った若い日々でありました。

昭和63年7月 鹿島・波崎の研究所に単身赴任したのを機会に何か関東ではじめたいと思っていた矢先に、波崎の研究所が建っている「若松」の地名が常陸風土記に出てくる古代砂鉄出土の地である事を知り、また、何気なく訪れた波崎日川の砂丘・九十九里の浜で大量の砂鉄を見て、何か因縁めいた感じを受けて始めたのがこの『たたら探訪』のスタート。

自分の趣味として『たたら 和鉄』にこだわって日本各地行く先々でcountry walk。

銚子から岬町大東崎まで砂鉄の砂浜「九十九里浜」を歩いたのをスタートに日本古刀の里 千種・備前。

奥出雲の「たたら」そして奥三陸の海岸へ。

学問的に緻密な裏づけを求めるわけではなく、ただその地に行ってただ立たずんで、地形を眺めながら、この地の人の足跡をまた時代を思いめぐらすだけの探訪。

でも、色々な場所で多くの人に会い、本当にこの10数年非常に楽しい胸わくわくのlife workとなりました。

鹿島・波崎から次の赴任地 山口県美祿では秋吉台の麓 中国山地の奥深い山の中。しかし海岸には弥生時代に大陸からやってきた数百体の渡来人が、望郷の念を抱いて西の海を眺めながら眠る「土井が浜弥生遺跡」があり、鳥取・岡山から島根奥出雲にかけての奥深い山々には数多くの「たたら」の跡。せっせと通いました。この間 美祿ではコンピュータ革命の一端を担った世界最先端の技術開発にも携わり、先端ビジネスの厳しさ面白さ そして若い人たちとの交流の中から生まれるクリエイション。都会では味わえぬ多くの事と素晴らしい仲間を得ました。

結婚した娘が住んだ鳥取県米子。大山の麓伯耆の国・出雲の国は古代鉄が日本誕生のドラマを演出した土地。

そして、親父が生まれ育った丹後の羽衣伝説は「鉄伝播」の証。丹後の家の直ぐ北の丘から突如古代この地方の鉄を支配した豪族の墓が出てきたのにもビックリでした。

東北にも隋分通いました。

青森三内丸山遺跡・縄文のストーンサークルなど青森へせっせと通う中 鉄のない縄文の時代のすばらしさと多くの仲間にも出会えました。先人の墓を中心に丸い輪になって暮らす縄文人。

「現代人として 何か忘れ去ったものを取り戻したい。・・・」いつも そんな感じがしています。

古代文明論に詳しい森本哲郎氏は「三内丸山縄文遺跡」が「世界三大文明にも匹敵する木の文明」であると指摘された。巨大柱に支えられた檜や大型住居などが整然とならぶ巨大都市。森の中に作られた多彩な植物栽培と日本全国から集まってきた漆・土器・石器の数々。

この「巨大木の加工技術」はさらに時代を経て 船による日本各地との交流をさらに盛んにし、空高くそびえる出雲大社の空中神殿 そして東大寺大仏殿へ。 さらに日本各地に残る「御柱」へと連綿と日本文化・文明をつないで行く。

石器から鉄器へと変化はしたが、「加工工具の技術」や「加工技術」の果たした役割の大きさは世界文明としての位置付けを指摘されるとあらためてその技術の偉大さにただビックリ。

「和鉄」が日本産業の米としての物質的役割ばかりでなく、当初意識していなかったのですが、その時代時代の社会形成に大きな影響を与え、日本各地の伝説・神話を産み、「日本誕生」のドラマを演出し、「日本人の心情・文化」の形成にきわめて大きな影響を与えてきた事を知るに至って その広がりにはますますビックリしています。

「Iron Road・和鉄の道」この言葉を口にした時の広がり・人との繋がりはやっぱり「鉄の持つすごさ エネルギー」を物語っている。

今 鉄鋼は産業の米としての役割がゆらぎ、表舞台からは退場を余儀なくされていると言われる。

でも、先人の知恵が凝縮された鉄の世界。

『溶鋼のまばゆい輝き「閃光」と「くろがね」の落ち着いた「肌光」』

必ずや時代を動かす力として今後も多くの広がりをもたらして行くだろう。

この十数年 日本各地を歩いた「Iron Road・和鉄の道」Country Walk。大半は家内と二人の「二人三脚」。まだまだ 行きたい場所考えたいことも多い。

津軽・兵庫千種・丹後そして山陰奥出雲はまだまだ通いたい。そして 東北・三陸 秋田・白神 近江・越 そして 朝鮮・中国へ いかねばならぬ field は無尽蔵。今後を楽しみにしています。

そこから また 何が出てくるのか・・・・・・・・

2001. 8. 15. 神戸にて 2003. 5. 15. 追記

材料技術屋 40年 いろんなことが在りましたが おもしろい材料技術屋人生でした
今後も姿勢は同じ 『さあ 第一歩 先に向かって』です。

2003.6月 鉄にたずさわれたことを誇りに思いつつ

M. Nakanishi Internet Home Page 『IRON ROAD 和鉄の道』

<http://www.asahi-net.or.jp/~zp4m-nkns/index.htm>